



文化遺産特別演習 報告書

第3号



遠藤周作文学館にて

北海学園大学人文学部



文化遺産特別演習 報告書

第3号

目次

| | |
|--|----|
| 令和5年度 文化遺産特別演習 報告 引率教員 片岡 耕平・渡部あさみ…………… | 12 |
| 長崎と海外の関わり | |
| 小泉晴十郎 …………… | 14 |
| 異文化と調和する長崎 | |
| 藤村 優那 …………… | 16 |
| 外国と長崎の関係の歴史的变化を感じる | |
| 松田 智温 …………… | 19 |
| 長崎に入り混じる中国宗教・文化 | |
| 山川 愛 …………… | 21 |
| 長崎の歴史から考える日本と外国の関係性 | |
| 吉田 遼人 …………… | 24 |
| 文化遺産特別演習を通して学んだこと | |
| 横川奈々香 …………… | 27 |
| 文化遺産特別演習 ―唐人屋敷跡地と中国茶― | |
| 嶋宮亜香里 …………… | 30 |
| 軍艦島クルージング・高島炭鉱跡地における歴史継承の現状 | |
| 寺田 望 …………… | 33 |
| 賑を伏せる街 | |
| 森崎 涼音 …………… | 37 |
| 文化遺産特別演習を通して学んだこと、感じたこと | |
| 田中 龍生 …………… | 41 |



集合@新千歳空港



バスに乗る@福岡空港



札幌～福岡
～平戸



平戸城



平戸オランダ商館



平戸城天守閣からの眺め



松浦史料博物館



説明を聞く@松浦史料博物館

2日目
9月12日
平戸～外海
～長崎



外海出津教会



平戸春日集落



平戸春日集落案内所「かたりな」



世界遺産の標識@春日集落



説明を聞く@「かたりな」



お茶をいただく@「かたりな」



外海大野教会



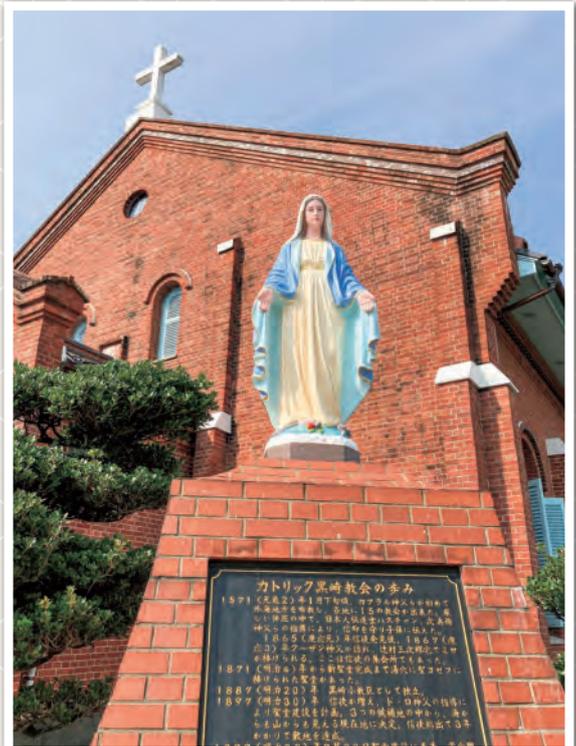
東シナ海を眼前に大野集落を歩く



遠藤周作文学館



説明を聞く@遠藤周作文学館



外海黒崎教会

3日目
9月13日

長崎市内
(自主研修)



トロッコ@高島石炭資料館



高島・仲山新坑



旧グラバー邸宅内



三菱社章@高島石炭資料館



旧グラバー邸



出島



マリア観音@長崎歴史文化博物館



長崎歴史文化博物館



踏絵@長崎歴史文化博物館



一本柱鳥居(原爆遺構)



媽祖像@長崎歴史文化博物館



皿うどん



市電



3日目
9月13日
長崎市内
(自主研修)



浦上天主堂



浦上刑務支所中国人原爆犠牲者追悼碑



丸山・長崎検番



崇福寺



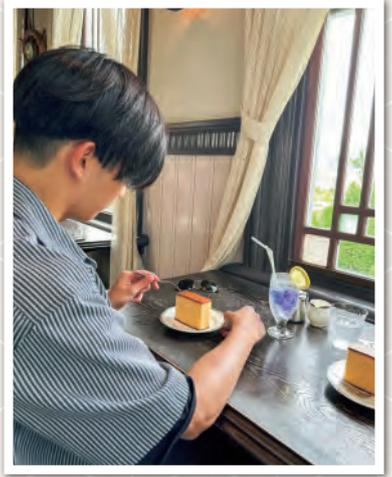
丸山・中の茶屋



眼鏡橋



孔子廟



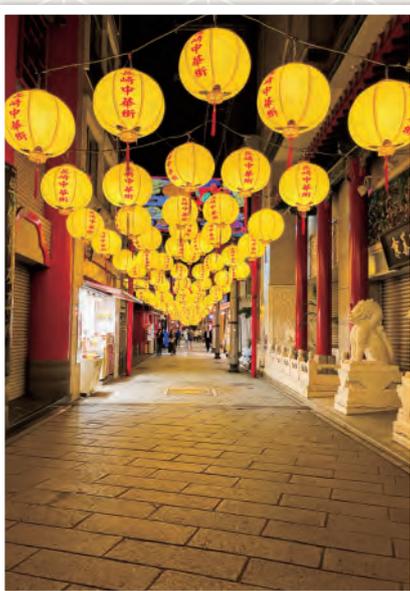
休憩も挟みつつ…



長崎くんちの練習



中華街北門



夜の中華街



諏訪神社

4日目
9月14日

長崎市内
(自主研修)



三菱長崎造船所



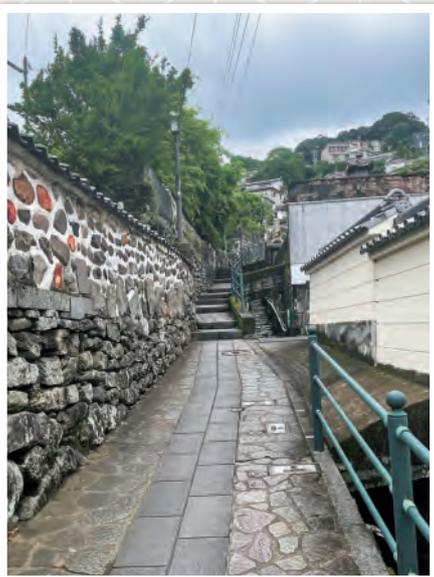
爆心地公園



大浦天主堂



平和祈念像



龜山社中へと続く龍馬通り



興福寺

4日目
9月14日
軍艦島



軍艦島



クルーズ船に乗る



軍艦島に近づく



軍艦島を見る①



軍艦島を見る②



船内

令和5年度 文化遺産特別演習 報告

引率教員 片岡 耕平・渡部あさみ

文化遺産特別演習は、日本にある文化遺産を実際に訪れることで、日本と世界との関係性を考える現地体験型アクティブ・ラーニング形式の特別演習として開講されました。今回の研修先は「九州地方（平戸・長崎）」でした。事前学習では、長崎の国際交流の歴史と潜伏キリシタン・明治日本の産業革命・原爆被爆都市と平和をキーワードに学び、各学生が文献資料による調査を行いました。

研修では、世界遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」・「明治日本の産業革命遺産」の構成遺産を中心に遠藤周作文学館や長崎原爆資料館、長崎歴史文化博物館などを9月11日（月）～9月15日（金）の4泊5日の日程で巡りました。

本演習は令和元年度に開講されましたが、令和2年、令和3年は新型コロナウイルスの出現と感染拡大により実施が見送られました。その後、令和4年度に続き、今回の実施は3回目となりました。今回は以下の10名の1年生～3年生の学生が参加しました（1部日文7名、2部日文1名、1部英米2名）。

小泉 晴十朗・藤村 優那・松田 智温・山川 愛・吉田 遼人・横川 奈々香・
嶋宮 亜香里・寺田 望・森崎 涼音・田中 龍生

旅程は次の通りです。

- 9月11日（月） 新千歳空港から空路で福岡空港に到着。平戸城・松浦史料博物館・オランダ商館跡を見学研修。平戸宿泊。
- 9月12日（火） 平戸市春日集落・外海町大野集落・同出津集落・遠藤周作文学館を見学研修。長崎市内泊。
- 9月13日（水） 各自研究テーマによるフィールドワーク・調査（終日自由行動）。長崎市内泊。
- 9月14日（木） 軍艦島デジタルミュージアムを見学後、軍艦島クルーズに参加（午前）。各自研究テーマによるフィールドワーク・調査（午後自由行動）。長崎市内泊。
- 9月15日（金） 長崎空港から羽田空港で乗り継ぎ、新千歳空港到着。

平戸と長崎は、ともに世界との交流の拠点として栄えた歴史を持ちます。平戸は、古代以来大陸との間を往来する者たちにとって欠かせない寄港地の1つであり、16世紀以降はアジアに進出し始めたヨーロッパ諸国の貿易商たちの活動拠点になりました。16世紀に開港した長崎は、その平戸の役割を受け継ぎ、とりわけ17世紀から19世紀にかけて江戸幕府が鎖国を続けた間、世界に開かれた唯一の窓口でした。当然、2つの街の各所に、長きにわたる交流の

痕跡が世界遺産を構成するものも含めて散在しており、「日本と世界との関係性を考える現地体験」を目指すこの演習の恰好の舞台であると言えます。

そのような街の特質を考えて、今回は、学生各人が自分でテーマを設定し、それに基づいて見るべき物を自分で見てくるフィールドワークの時間をできるだけ多くとるようにしました。但し、当初は5泊6日での実施を考えていましたが、昨今の旅費の急激な値上がりもあって、上記のように4泊5日に短縮せざるをえませんでした。短縮せざるをえなかった1日をフィールドワークに充てることができれば、もう少しゆっくり、そしてより深くテーマについて考察することができたであろうと思うと残念ではあります。しかし、学生たちが、それぞれに明確な目的を持って訪問地を選び、実際にそこを訪れたことで感じるどころがあったことは、この報告書を見ていただければ分かると思います。テーマが集中してしまうのではないかという事前の心配をよそに、「猫」・「お茶」・「強制連行」・「遊女」をはじめとする多様なキーワードが出てきたのは嬉しい誤算でした。

残念ついでに言えば、軍艦島に上陸できなかったのは本当に残念でした。基本的に好天に恵まれた5日間でしたが、よりもよって4日目の午前中だけ線状降水帯が長崎市上空に居座った影響で、島周辺の波の高さが、条例が上陸を許す範囲には収まりませんでした。船上から遠目に見るだけでも、写真で見るとは違う雰囲気を感じることができたので、間近で見ればさらに印象が違ったのだらうと思っています。

最後になりますが、旅行のコーディネートのみならず、早朝の新千歳空港での見送りまでしてくださった日本旅行北海道札幌支店の片桐圭一さんにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

長崎と海外の関わり

1 部日本文化学科 1 年 2723130 小泉 晴十郎

はじめに

私がこの文化遺産特別演習に臨もうと思ったのは、九州を訪れたことがないことや、九州に触れる機会が人生で少ないと思ったからだ。私は九州の文化に何があるのかさえもほとんど知識がなく、九州という地にそこまで興味はなかった。そうした時に、九州の地である長崎県に研修旅行をするという文化遺産特別演習を知り、私は良い機会だと思いこの講義を受講した。

最初の頃は長崎県といえば、「長崎ちゃんぽん」くらいしか想像できなかったが、調べていくうちに長崎県の凄さを知っていった。とにかく昔から海外との関わりが多く、それほど大きな県という訳ではないのにも関わらず、文化遺産が多いことに興味を持った。私は、長崎県に海外から取り入れられたものや積極的な交流がある中国の関係、長崎県内の建物とそれが建設されるまでの過程を主に調査することにした。

1. 取り入れられたもの

長崎県は鎖国があった時代に、中国とオランダのみと貿易を許されていた。そんな海外との貿易舞台長崎県だが、現在の日本には当たり前のようにあるものが昔、この県に伝わった。食材であれば、じゃがいも、トマト、いちごなどだ。また、砂糖も重要な伝来物のひとつと言われている。食材以外にオランダからは、ビリヤードやバドミントンなどが伝わっていた。私は4日目に長崎歴史文化博物館という場所に訪れた。そこでは朱印船貿易のことが書かれており、生糸や絹織物、鹿皮、香辛料などの品々が輸入されたと記されていた。こんなにも長崎県は日本の発展に貢献していったのである。朱印船貿易を行っていた長崎県があることによって、今が作られていると感じた。

2. 中国との関わり

私が中国と関わりのある建物で一番印象に残ったのは、3日目の自主研修で訪れた長崎孔子廟・中国歴史博物館という場所である。ここは1893年に清朝政府と在日華僑が協力して建てたもので、日本で唯一の本格的な中国様式の孔子廟だ。隣接している博物館は、1983年に中日両国の相互理解と文化交流を目的に新設された。この場所は、まるで違う国に来たような空間である。入場して最初に目につくのは儀門と呼ばれる正門だ。日本の寺の門と似ず、中国を代表する龍が至る所に飾られ、赤を基調とした派手な門である。その門をくぐると正面に大成殿があり、その道のりに72賢人石像というものが並んでいる。これは「六芸」に通じた石像であり、六芸とは徳、知、体に秀でた六つの才能という意味である。本格的な孔子廟ということもあり中国の歴史や文化を感じることができ、これが長崎に置かれていることから長崎が中国と親しかったことが分かる。

孔子廟以外にも長崎新地中華街という場所に訪れ、中華料理を楽しんだ。この場所は、入口に大きな門が飾られており、これにも龍や赤を基調とした装飾が施されていた。中に入っていくと上には「長崎中華街」と書いてある提灯が無数に並んでおり、夜になると幻想的な空間になった。近くの家屋根にも装飾が施されており、細部までこだわっているなと感じた。孔子廟や中華街などを見てきたが、どれも派手なものばかりで最初のインパクトが大きかった。かなり力を入れていることが感じられた。

3. 建物

長崎県内には多くの文化遺産や観光となる建物があり、その多くはキリストや海外と関わりのあるものが多い。自主研修も含め、色々な建物を見てきたがその建物が建設されるまでの過程・歴史が気になった。

まずは大浦天主堂だ。2018年に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として文化遺産になった大浦天主堂。禁教の中で造られたこの建物はプティジャン神父が天草出身の請負人、小山秀乃進と契約をかわし建設に着手した。建設費は4億円前後で、外観は黒地に白い格子のナマコ壁であり、和洋折衷の建物だ。祈りの場や、殉教した26人の聖人に捧げる教会を目的に建てられた。実際に訪れると、思った以上に大きな建物であり、現在も綺麗に保存されていた。潜伏キリシタンの苦難と悲慘さが感じられた。

次に原爆資料館と平和公園だ。戦争という悪い意味でも海外と関わりがある長崎県。1945年8月9日、長崎は原爆の被害にあった。多大な人数の犠牲者が出て、忘れられない歴史となった。原爆資料館と平和公園は恒久平和を希求し造られたもので、当時の原爆の様子や平和の像が建てられている。溶けてねじ曲がった瓶や破けてボロボロな服が展示されており、悲慘さが伝わってきた。この原爆はドイツを対象に開発されていたものだが、後に日本の長崎へと変わった。投下の理由は早期決戦の為にともいわれている。平和公園には原子爆弾落下中心地碑があり、平和が祈られている。私は、この資料館を訪れたことで原爆の恐ろしさを改めて再認識した。当時の展示物を見れば、原爆の威力さえも分かってしまう。戦争の残酷さを理解した。

おわりに

長崎県が、こんなにも日本にとって重要な場所だとは思ってもいなかった。日本を作り上げた場所だと言っても過言ではない。実際に訪れなければわからないことが多々あり、とても勉強になる場所である。この研修旅行を通して、長崎県を楽しみながらも長崎県を知ることができ、知識となった。長崎県に限らず、色々な都道府県に旅行をして、その場所の良さを知っていきたくてそう感じる演習になった。

[参考資料]

- ・『長崎の原爆被害における基礎知識』、四條知恵、2008.3
- ・各施設パンフレット

異文化と調和する長崎

1 部日本文化学科 1 年 2723184 藤村 優那

はじめに

本稿では、長崎県での文化遺産特別演習の活動報告を述べる。筆者は長崎県を訪れた経験はなく、長崎県に関する知識は、原爆が落とされた地域であること、潜伏キリシタン関連の遺跡などが多数残されていることなどのみであった。

複数回の事前学習と事前学習後の個人的な学習を通して、長崎県の異国との交わりによる独自の文化や丸山遊郭について興味がわいた。したがって、今回の研修テーマは以下の三つとした。「寺院や資料館の見学を通して、長崎という地域の独自性を明らかにする」「独自性を明らかにしたうえで、丸山遊郭との関連性を見つける」「丸山町周辺の散策を行うことで、丸山遊郭の様子を探る」。

以上のテーマを念頭に置きながら、全体での研修と長崎市内の一日半の研修を通して考えたことを述べたい。

教会、寺院、資料館等の見学を通して

5 日間の研修を通して、多数の教会や寺院を訪れることができた。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺跡」である「出津集落」の構成資産の一つである大野教会は、山の奥にあり、最低限の礼拝をささげられる環境とマリア像のみがあった。そういった限りなく質素な雰囲気のある教会がある一方で、のちに訪れた黒島教会や大浦天主堂、浦上天主堂などにはステンドグラスがあったり彩色の施されたマリア像があったり、教会一つとってもその教会の成立背景などによって全く違う様子になっていた。それぞれの教会の違いは、実際に訪れてみないと感じるこのできないものであり、現地に研修に赴いた意味を改めて考えさせられた。複数の資料館で、鎖国中から原爆が投下される時期までの資料を見学してきたが、マリア観音像などをはじめとし、すべての時期にキリスト教関連の資料があった。また、長崎市内の散策を通して、多くの人が観光に訪れるような有名な教会以外にも多数の教会がみられた。以上のことから、長崎の人々とキリスト教には強い結びつきがあると推測した。

自由研修では、寺町と呼ばれる市街地を散策し、いくつもの寺院を見学した。特に興福寺と崇福寺の景観は印象的で、中国建築様式と和様式が調和していた。赤く特徴的な形をした崇福寺三門は日本によくあるようなものとは異なり、筆者の寺院の想像の域を超えるものであった。唐など現在の中国にあたる地方の影響を大きく受けているものが多い長崎市内の寺院は、一般的に想像される寺院とは様子が異なっている。多数の資料館で諸外国とのつながりを示す輸入品などを見ることができ、諸外国と交流品から独自の文化が作り上げられてきたことが分かった。

以上の教会、寺院、資料館等の見学を通して、長崎がポルトガルや中国との交流を通して独

自の文化が形成されたことを、身をもって理解し、本研修のテーマの一つである「寺院や資料館の見学を通して、長崎という地域の独自性を明らかにする」ことができたと思う。

ポルトガル貿易の開始とキリスト教

平戸や出島など、長崎県が貿易港であったことは一般的に広く知られている。本研修一日目は平戸に訪れた。平戸城、松浦資料博物館とオランダ商館跡では、長崎の出島周辺にその機能が移るまで、平戸が海外との窓口として栄えたことを知ることができた。

1550年にポルトガル船が平戸に初めて来航してからの歴史、貿易を通して変化した文化を学び、実際の輸入品などを見学することができた。展示されていたお皿やガラス製品の曲線や施された細工は非常に美しく、貿易の主要な品ではなかったものの高値で取引されたという。他にも、中国産の生糸や絹織物、砂糖等がもたらされた。したがって、平戸には堺や京の豪商、外国商人が集まり「西の都」と言われる賑わいを見せた。

しかし、ポルトガル貿易に伴ってやむを得ずに認めたキリスト教に好意を抱かない藩主と武士、ポルトガル商人との間で衝突が起きた事がきっかけとなって平戸でのポルトガル貿易は15年で終了した。平戸での外国人の立場は、その機能が移された出島よりもよく、外国人商人らは平戸への想いを募らせたという。

出島での貿易と遊女

以上のような経緯で、貿易港は平戸から長崎の出島へ移された。貿易によるキリスト教布教など、出島の商館員と日本人の接触への危機感から出島に移されたこともあり、出島への人の出入りは厳しく制限されていた。また、出島にわたってきた商館員の妻子は、正式な妻子でさえも出島に入ることが許されなかったというのが通説である。「妻の同伴を願う者がいる一方で、出島の中には常に遊女たちの姿があり、彼女たちを送り込む側も呼び入れる側も、それを当然と思っている」（松井、2009、30（206））と松井が述べるように、妻子を同伴しての出島滞在が許されなかった彼らの中には、遊女を迎えていたものもいたのである。

出島の記録をつたえる資料の中には、その暮らしを描いた絵も含まれている。先述のとおり出島への人の出入りは厳しく制限されていたが、出島の様子を描いた絵の中には多数の着物を着た女性たちを確認できる。彼女たちは鎖国時代に阿蘭陀商館への出入りが唯一許された丸山遊女たちであり、「オランダ行き」と呼ばれていた。ひと月の八割以上もの期間、出島に赴いた記録も残っている。

丸山遊女たちのいる丸山は、江戸の吉原、京の島原とともに日本三大花街として栄えた。江戸時代の丸山とは現在の丸山町を指すのではなく、丸山町と寄合町を合わせた花街の総称であった。その丸山は、市中に散在していた遊女屋を官命により一か所に集めたのがはじまりで、全盛期とされる元禄時代には1443人を超える遊女がいたとされる。明治時代に解体されるまで、国内の有名人から外国人商館員までが足しげく通ったという。長崎が貿易港として栄えるために必要な役割を担っていた丸山遊女に興味を持ち、彼女たちが暮らした街の現在の様子を探りたいと思ったため、自由研修では丸山町周辺の散策を行った。

丸山町は、多数の寺院がある寺町の向かい側に位置している。道幅の広い道路を挟み、徒歩5分程度で移動可能である二つの町であるが、街並みが全く違っていた。寺町がきれいに整備された真っすぐな道が多い一方で、丸山町周辺は入り組んだ道が多く、立ち並ぶ家屋も新しい家屋と木造の古い家屋が半分ほどの割合でほかの長崎市内の町とは異なる雰囲気であった。

丸山町では主に、丸山オランダ坂、梅園身代わり天満宮、長崎検番、見返り柳、などを訪れた。丸山オランダ坂とは、一般的に広く認知されているオランダ坂ではなく、その名の由来は諸説あるが阿蘭陀商館に通う遊女たちが通った坂のことで丸山町にある。オランダ坂をのぼり民家の間を抜けると、梅園身代わり天満宮に行くことができた。梅園身代わり天満宮は、小高い丘の上にある。丘を下った先には、花街として栄えていた時代からのこる史料料亭「花月」などの料亭がある。また、現在は芸者さんなどの取りまとめなどを行う長崎検番もあり、当時、梅園身代わり天満宮に遊女たちが通ったとされる理由が分かった。

まとめ

長崎は平戸が開港してから貿易港として栄え、現在まで外国と交流してきた。その間、キリスト教や仏教などの宗教、食べ物などの文化が流入し、それらの文化と日本の文化をうまく調和させながら発展してきたことが推測される。

また、特に国際的な街として栄えるうえで丸山遊女たちなど長崎に住む日本人が直接関わりながら、長崎の歴史の中で最も有名な一つ出島での貿易が成り立っていた背景があった。性産業など一般的に目を背けたい部分でも、交流があったことが興味深い。

また、実際に丸山町を散策したことで花街が解体されてもその様子を想像しやすくなり、十分に探ることが可能であることが分かった。

実際に現地を訪れ、見学することで今までのイメージを再構築することが可能であり、フィールドワークの重要性が分かった。今回の事前学習の過程で、北海道にも遊郭があったことが分かった。今後調査する際には、実際に訪れたいと思う。

[参考文献]

片桐一男、『出島遊女と阿蘭陀通詞―日蘭交流の陰の立役者―』、勉誠出版、2018年

松井洋子、「長崎出島と異国女性：「外国婦人の入国禁止」再考」『史学雑誌』、2009年、118巻、2号、p.177-212

ながさき旅ネット（nagasaki-tabinet.com）2023.11.16

外国と長崎の関係の歴史的变化を感じる

1 部日本文化学科 1 年 2723192 松田 智温

はじめに

私は江戸時代を中心とし、長崎を通じて日本と外国の関係性の変化を捉えるという目標のもと四泊五日の文化遺産特別演習に臨んだ。長崎は外国と日本をつなぐ窓口の一つとして栄えてきた。外国との関わり合いの多様性は想像以上に底の知れないものであり、長崎を歩いているとその国際性の豊かさに圧倒された。長崎には様々な時代、時期の歴史的遺産が混在している。そのため、時間とともに移り変わっていった外国との関係性を直に自らの体で体感することができる。これは長崎が持つ特色であり、私が目標を決める中での最大の要素だった。

私が長崎で体感した外国との関係性について研修の際に発見したことや考えたことも踏まえて述べていく。

対等関係から鎖国へ、劇的な関係性の移り変わり

日本では外国と対等であった関係から禁教、鎖国を経て外国に対して敵対するようになっていった関係性の転換が生じていた。長崎は日本と外国の関係の変化の影響が最も顕著に表れている場所であり、自主研修でめぐった歴史的遺産にも変動の形が大きく表れていた。

対等な関係を形として見やすくしているのはやはり、戦国時代から江戸時代前半にかけて盛んだった南蛮貿易と徳川家康が中心となって行われていた朱印船貿易ではないだろうか。どちらの貿易も拠点の一つとして長崎が開港されている。南蛮貿易ではポルトガル人、スペイン人といった南蛮人が、朱印船貿易では東南アジアの人々が中心となって当時の日本と貿易を行っていた。なぜ、私が前者と後者を対等な関係の形としてみているのか。それは双方に共通点が見られているからである。もちろん、どちらとも貿易であることは大前提である。ずばり、それぞれの貿易によって生み出された文化の融合の形である。私は長崎歴史文化博物館を訪れた際にこの共通点に気づくことができた。まずは、南蛮貿易についてである。1550年のポルトガル船来航を機に始まった貿易であるが、その当時の壁絵の中にある南蛮寺の形を見た際に驚いた。その風貌は一見、普通の寺に見えるのだが屋根の上には堂々と十字架がそびえ立っていたのだ。教会を作るのならば大浦天主堂や浦上天主堂のような形状が適しているだろう。しかし、和と洋が結合しているということは目線が対等であり、お互いの異文化について十分な理解があったということではないだろうか。

朱印船貿易では、日本町の興隆について同じことが言える。朱印船貿易は日本から東南アジアへと出かけて行った貿易のことであり、徳川家康が朱印状を持たせたことで有名である。日本町では東南アジアの各地で作られ、シャムの山田長政などがよく知られている。異国の地で独自の生活態系を育むことは当時の関係性の良好さを表しているだろう。また、山田長政は当時のタイであったシャムの国王に信任されたこともあり、対等かつ信頼しあう関係があったこ

とは間違いない。これらのことから、私は対等な関係があったと考えている。では、どのような流れで関係性が反転していったのか。私が訪れた出島、唐人屋敷がそれを物語っていた。出島は鎖国政策の一環としての人工の島であり、キリスト教を布教していたポルトガル人を収容するために25人の有力な長崎町人の出資によって完成された。また、唐人屋敷は幕府による中国人の管理統制の増強のために建設され、広さは出島の2.5倍ほどで特別な日以外での外出は禁止されていた。前者、後者ともに活動を制限する施設である。私は、制限するほどに日本が外国に敵対するに至った理由が幕府と外国人との間の意図のすれ違いにあると考える。日本にやってくる外国人の中には宗教の布教などを目的とした人たちも、多く時間が経つにつれて勢力が拡大していった。しかし、宗教というのは性質上、他の考え方を持つ宗教に対し異教徒であるとして攻撃的な性格を持つ場合がある。それは日本に入ってきたキリスト教も例外ではなかった。神道系である諏訪神社の社殿の建設者である青木賢清は、キリシタン達に天狗、悪魔などと罵倒され妨害もひどく、さらには諏訪神社の社寺も破壊されたという。海外貿易の中で他国の宗教を受け入れるのならば、仕方のない事象ではあるのだが、幕府側は他国の宗教は危険であると認識するようになった。その結果、禁教政策によって諸外国に対する貿易が縮小されるようになった。また、禁教政策による貿易の縮小は、密貿易の増加のきっかけにもなってしまった。特に、減少した利益の不足分を補おうとした唐人たちの密貿易が多発し、治安を乱すこととなった。幕府は日本を保護するため、関わり方の変化を余儀なくされた。日本での諸外国の活動は幕府に危険であるとされ、日本の保護のための幕府の動きは諸外国には拒絶と認識されるようになった。このようなすれ違いの結果、敵対へと至ったのである。鎖国などの対外政策は、幕府が一方向的に異国の文化、思想を迫害したと感じていた私にとって衝撃的であった。

終わりに

実際に歴史的史料を目で見て体感することは、私の歴史理解についての視野をとっても広げてくれた。九州が舞台であったこともあり普段とは全く違った景観から受け取った知識は新鮮であり、私になかった感性を刺激してくれた。私が固定化していた歴史は四泊五日の旅を経て完全に瓦解し、新しい理解とともに柔軟なものへと変わった。外側の印象や形だけで一方向的に歴史像を捉えるのではなく内側からしっかりと学習し、ときには体感してあるべき姿で存在している歴史をみることが大切なのだ。それを教えてくれた文化遺産特別演習であった。

[参考資料]

1. 【公式】長崎観光／旅行ポータルサイト ながさき旅ネット (nagasaki-tabinet.com)
2. 長崎市公式観光サイト「travel nagasaki」(at-nagasaki.jp)
3. 『日本の歴史 鎖国』、岩生成一、2005、中公文庫
4. 各パンフレット、メモ等

長崎に入り混じる中国宗教・文化

1 部日本文化学科 1 年 2723199 山川 愛

江戸時代初期に貿易の中心であった長崎は、現在でもオランダや中国の文化が根付いている。その事実を踏まえ、入り込んだ他国の文化が元来の日本の文化にどのようにして溶け込んでいくのかを知るため、この文化遺産特別演習を受講した。

本稿では、江戸時代初期には中国とどのような交流をし、また、当時の中国は長崎の町に何をもたらしたのか、宗教とそれに関連した文化を主軸として論述していく。

江戸時代初期、長崎に暮らし始めた中国人は、航海安全と先祖供養のために唐寺を創建した。この唐寺というのは中国人が出身地ごとに建てた寺を総称したものであり、現在でも長崎市内には興福寺・福濟寺・崇福寺・聖福寺の4つが残されている。

唐寺には媽祖や関帝なども祀られ、季節ごとに祭祀が催された。中国から禅僧の隠元が渡来すると、黄檗宗の寺院として発展する。朱色の建物や石造アーチ門などは中国らしい建築様式となっている。やがて、幕府が管理統制を強めると、中国人の生活は唐人屋敷に限定され唐寺や唐人屋敷は中国文化の発信地となり、その影響は現在に至るまで色濃く残されている。次章ではここで述べた隠元の渡来、媽祖信仰、黄檗文化について概説する。

1. 隠元の渡来

隠元は長崎に暮らす中国人に招かれ、中国福建省から長崎へ渡来した。隠元が宇治の万福寺で開いた黄檗宗は、幕府や大名の支援もあり後に全国へ広がる。隠元とともに渡来した人々によって最新の中国文化が日本に伝えられた。

2. 媽祖信仰

中国宋時代の福建省に起源をもつ航海安全の女神である媽祖は「天妃」、「天后」あるいは「菩薩」とも呼ばれた。唐船に祀られた媽祖像は、長崎に到着すると「菩薩揚」と称して唐寺に安置された。初めは航海安全の守護神として崇められていたが、やがて家内安全、商売繁盛などの神として信仰を集めるようになった。

実際に崇福寺には媽祖堂があり、そこに立ち入る際にくぐる門として媽祖門があった。この媽祖門は媽祖行列などの祭りがあるときには使われる神輿が下ろされる。渡り廊下の役割もあるこの門の天井は黄檗天井と呼ばれるつくりとなっていた。

3. 広がる黄檗文化

隠元らによって黄檗文化が中国から長崎へ伝えられた。福建地方の影響が強い写実的な仏画は、逸然や河村若芝によって長崎から全国へ広がる。黄檗僧の伸びやかで自由な書風は「唐様」

として珍重された。

長崎歴史文化博物館でそれとみられる仏画を見ることが可能であり、媽祖の像も同じく見ることができる。

4. 釈迦如来像の五臓六腑

釈迦如来座像の胎内に般若心経が書かれた経巻で包まれた五臓六腑と銅鏡が納められている。これは日本の習慣になく、この仏像が中国から寄贈された証明になる。

崇福寺本堂の仏像群大雄宝殿の本尊は釈迦如来坐像、向かって右脇侍は迦葉尊者、左は阿難尊者で、ともに立像である。これらはすべて乾漆像（彫像を造る技法の一つで、麻布や和紙を漆で張り重ねたり、漆と木紛を練り合わせたものを使って形作る方法）で内部が空洞になっており、胎内から銀製の五臓と布製の六腑が発見された。五臓には、承応2年（1653）の年号と寄付集め世話人の何高材の名前が、六腑には河西南昌府豊城縣仏師徐潤陽ほか2名の墨書の記載があった。

左右に並ぶ十八羅漢は、内部が空洞である寄木造（仏像を制作する際に、複数の木材をはぎ合わせて作る方法）で麻布を置き漆で固めたものである。羅漢奉加人数という延宝5年（1677）の巻物が三尊像の胎内から発見されたこと、加えて唐僧南源の手紙に唐仏師3人が崇福寺で羅漢を造るという記載があり、三尊像の制作から24年の隔りがあるが、十八羅漢を制作した3人も、同じ徐潤陽ほか2名の可能性もあるとされている。また、前述した仏像のいずれも日本の習慣になく、中国から寄贈された証明となる。

実際に釈迦如来像の五臓六腑を確認することはできなかったが、像を見たとき、青銅でできたものだと勘違いするほど精工なつくりであったと思える。

5. 隠元と黄檗宗

以下、隠元の広めた黄檗文化の歴史と日本文化に影響を与えた黄檗文化について、徐金鳳の文献から引用する。

高僧隠元が1654年来日し、二十人の弟子を引き連れて長崎に至り、興福寺に入ったが、後に崇福寺に移り、さらに江戸に出て、1659年四代将軍家綱に宇治の寺地を賜った。隠元はここで明朝風の伽藍を構え、黄檗宗の本山万福寺を建てた。（中略）万福寺にて隠元は明朝風の法式勤行を行い、特異な念仏禅を挙揚し、黄檗宗の系統を作った。この新来の禅に日本僧が相次いで参じたが、とくに儀礼の面で日本の禅界に多大の影響を与えた。（中略）今日、法系としては臨済宗の白隠慧鶴の系統に変わったが、中国風の法式勤行は現在も伝承されている。（中略）隠元とともに渡来した文人工匠らによって、普茶料理や煎茶などの生活文化、また明朝風の建築様式・画像・彫像・詩文・書などの黄檗風といわれる文化が移入され、日本で独特の発達をみせた。黄檗宗は飲食・宗教などをはじめとする日本文化に多大な影響を与えた。（徐，2021，p.68）

6. 最後に

仏教は日本の奈良時代に中国から伝わり、臨済宗や曹洞宗を含む宗派は衰退の兆しを見せていたが、隠元禅師の到来が日本の仏教復興の大きな契機となった。隠元を代表とする黄檗文化は、「中日交流史の宝石」とも称され、交易の場であった長崎をはじめ、現在では日本の三禅宗として受け継がれ、また、日本の生活の中にも深く根付いている（「黄檗文化はなぜ日本で栄えているのか」2023年8月17日、AFP通信）。

今回の演習で実際に、寺町での黄檗文化はもちろん、宗教文化以外にも長崎新地中華街や眼鏡橋などといった食や暮らしに根付いた中国文化を肌で感じる事ができた。また、旧暦の9月9日を重陽の良き日として祝う中国の風習がもとになった「長崎くんち」の練習の様子がみられたことから、現在でも中国の文化が元来の日本の文化と共生しながら根付いていることが分かった。

[参考文献]

徐 金鳳「江戸時代人及び文学による日中文化交流」『国際社会学部研究紀要』2021年、6号、67-72頁。
「黄檗文化はなぜ日本で栄えているのか」2023年8月17日、AFP通信、<https://www.afpbb.com/articles/-/3477408>（2023年10月27日閲覧）

長崎の歴史から考える日本と外国の関係性

1 部日本文化学科 1 年 2723208 吉田 遼人

～はじめに～

私はもとより日本が好きであり、そのため日本の文化や歴史に非常に興味があった。日本について学ぶということは、海外との関係や海外からの視点というのも欠かせない。今回の文化遺産特別演習で訪れた先である長崎は、日本の長い鎖国時代において唯一貿易が許された地であり、日本の中でも一番といっても過言ではない程に外国と関わってきた。そのため、長崎が、そして日本がどのように海外と関わってきたのかについて深められるよい機会だと思い、「長崎と海外の関係の変化を歴史的に捉える」というテーマのもと、この文化遺産特別演習に臨んだ。

学校や本などで勉強する知識ももちろん大切だが、実際に現地に赴かなければ気づけないことはたくさんある。今回の旅はこれをよく実感できた。これまで私がもっていた知識と今回の旅で得た体験をもとに、日本と外国の関係性について考えていこうと思う。

～鎖国前と鎖国後の変化～

日本の歴史を振り返る中で私は、日本は外国に対して比較的上手な立ち回りをしてきたのではないかとしばしば感じる。つまり、日本はその時代における立ち位置を正確に理解し、下手に出たり強い姿勢をとったりと、柔軟に対応できていたということである。例としては、中国との朝貢関係・南蛮貿易・禁教政策・鎖国・開国など、様々な形で外国と関わってきている。長崎はこれら全てを経験していると思われる。なぜなら、中国と地理的に近かったり、ヨーロッパ船が入港しやすかったり、鎖国中唯一貿易が許されていたりと、外国と貿易する上での好条件がそろっていたからである。それゆえに、長崎県にはいろいろな時代の様々な国の文化に影響された建造物が見られる。日本の外国との関わり方で最も大きく変化し、日本に大きな変化をもたらしたのは鎖国前と鎖国後の変化であると私は考える。そのため、その変化について、私の考えを述べることにする。

鎖国前の日本の対外関係で大きく急激に変化するものは、南蛮貿易が禁教政策によって終焉を迎えるという変化が代表的である。南蛮貿易というものは 16 世紀中頃に鉄砲が伝来して以来スペインやポルトガルを相手国とした貿易のことで、キリスト教からすれば布教活動と一体化して行われたものである。日本にヨーロッパ文化やキリスト教が広まり始めたのもこの時期からであった。その中で戦国大名がキリスト教や宣教師を保護する動きがはじまり、中には自らキリスト教に改宗したキリシタン大名も現れた。その理由は貿易でより利益をあげるためであった。しかし幕府は、キリシタン大名が団結して反乱を起こすなどのように、日本の内部からヨーロッパの影響が強くなってキリスト教国から侵略されることを恐れ、ついに禁教政策をとるようになった。今回の旅の中で私は大浦天主堂を訪れた。その大浦天主堂の歴史は鎖国前

の日本をよく表しているように感じた。これは自分の勉強不足もあり、大浦天主堂を訪れてみたら知った事実であるのだが、大浦天主堂はパリ外国宣教会によって祈りの場として、また殉教した26人の聖人に捧げる教会として1864年に建てられた。この26人の聖人というのは、日本で初めてキリスト教の信仰を理由に1597年に処刑された26人のことである。しかし、建てられたのが1864年というキリスト教の解禁後であるので、約270年もの時間がかかり、その長い間信仰を過度に弾圧されていたということを実感し、非常に心が痛くなった。そして、鎖国前の日本の姿を大きく感じる形となった。

鎖国後は文明開化の時期であり、日本は西欧の進んだ技術を取り入れ西欧列強と伍する存在を目指そうとしていた。そのため外国人の力を借りたりして積極的にヨーロッパ圏と接するようになっていった。これは鎖国前の日本の姿勢とは正反対である。それがよく見て取れるのがグラバー園である。グラバー園を訪れて、明治初期の日本に貢献した三人の外国人について詳しく知ることができた。一人目は、トーマス・ブレイク・グラバーである。グラバーは、当時の日本の工業で必須であった石炭の採掘の開設に携わったり、近代的な技術を用いた修船所を建設したりと日本の工業の成長に貢献してくれた人物である。二人目は、フレデリック・リンガーである。リンガーはホーム・リンガー商会やその支社として瓜生商会（現在はホーム・リンガー商会の名を引き継いでいる）を設立するなどし、貿易業務をはじめ豪華ホテルの開業など様々な事業に携わった人物である。三人目は、ウィリアム・ジョン・オルトである。オルトは九州各地の茶葉を海外へ輸出し「九州のお茶」を世界に広めたり、居留地内で自治会や商工会議所の初代議長を務めたりと日本と海外の多くの交流を行った人物である。このように、鎖国後の近代化（＝西欧化）を進める日本が鎖国前とは打って変わって、日本が西欧文化を受け入れながら国を成長させていく姿が見て取れる。

これらの歴史からわかるように、鎖国前と鎖国後では外国との接し方が大きく変わっている。時代が進むにつれて信仰の弾圧がほとんどなくなったことや、外国を拒絶することなく受け入れるようになったという変化は、多様性が認められていった過程であるので喜ばしいことであると感じた。しかし、日本の軸となる考え方は変わっていないのだとも感じた。なぜかというと、鎖国前の日本がキリスト教を禁止したのは外国からの侵略を恐れたからであり、鎖国後も黒船来航により半ば強制的に開国させられ、日本がこれから生き残っていくために西欧文化を受け入れたと捉えることができる。つまり、日本はどの時代においても生き残るための選択をとってきたのであったと考えたからだ。

～まとめ～

鎖国前と鎖国後の変化からわかるように、日本は外国との関係性はほぼ180°変化したと言える。しかし、先ほど述べたように関係性が変わっても日本の軸となる考え方は変わっていない。実際、日本は現存する最古の国であり、常に世界情勢に目を向けて生き残れるように立ち回ってきたという点からわかるように、日本は芯を持ちつつも外国との関わり方はこれからも変化していくものと思われる。なので、常に世界に目を向けることを怠ることなく外国とよりよい関係を築き、これからの社会の発展に還元して欲しい。

～おわりに～

今回の文化遺産特別演習では授業や本だけでは得ることのできない体験をすることで理解と関心が促進され、新たな視点を得ることができた。九州を訪れるのは初めてで、普段とは景色も気候も環境も違う地に身を置くことで新たな興味が生まれたり、感受性が高まったりした。やはり実際に現地を訪れ肌で感じることで、理解が心からの深いものになり新しい気づきを得ることができる。そして今後のモチベーションに繋がり、新しい学びへと結びつく。それを教えてくれた文化遺産特別演習であった。今回の文化遺産特別演習にかかわったすべての人に感謝したい。

[参考資料]

【公式】長崎観光／旅行ポータルサイト ながさき旅ネット
nagasaki-tabinet.com <https://www.nagasaki-tabinet.com>

長崎市公式観光サイト 「travel nagasaki」

長崎市公式観光サイト 「travel nagasaki」 <https://www.at-nagasaki.jp>

[参考文献]

『鎖国の正体：秀吉・家康・家光の正しい選択』、鈴木荘一、2022、柏書房

文化遺産特別演習を通して学んだこと

1 部英米文化学科 1 年 2923208 横川 奈々香

はじめに

今回、私は文化遺産特別演習で九州の長崎県の様々な場所に訪れた。研修前に立てた目標は、「既知の情報と新たな情報を結ぶ」である。この目標を立てた理由として、長崎といえば真っ先に思い浮かぶのが、隠れキリシタンであり、今回、研修で長崎を訪れることを知り、歴史が好きという観点から隠れキリシタン、潜伏キリシタンたちがどのような日常や生活を送っていたのか、本場だからこそ見たり知ったりできることがあると思った。また、原爆が投下された地であることから、高校の時に修学旅行で訪れた広島を見学して学んだことを踏まえ、長崎での被害状況や平和についての取り組みの違いについても考えたいと思い、今回このような研修目標にした。

1. 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産

長崎には、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」というものがあり、キリスト教禁教による宣教師不在の中、神道や仏教など日本の伝統的宗教や、一般社会と関わりながら進行を続けた潜伏キリシタンの伝統の証となる遺跡群を表す。それらは、国内に宣教師が不在となってキリシタンが潜伏したきっかけや、信仰の実践と共同体の意地のために密かに行った様々な試み、そして宣教師との接触により転機を迎え、潜伏が終わりを迎えるまでの歴史を物語る12の構成資産からなる。その中で私が訪れたのは、春日集落・出津集落・大野集落・大浦天主堂である。

2. 春日集落について

「平戸の聖地と集落」は潜伏キリシタンが何を拝みながら信仰を実践していたのかを示す4つの集落のうちの一つである。禁教期の春日集落の潜伏キリシタンたちは、禁教初期にキリシタンの処刑が行われた中江ノ島を殉教地として拝み、聖水を汲む行事を行う場とし、キリスト教が伝わる前から山岳仏教信仰の対象であった、安満岳なども合わせて拝むことによって信仰を実践した。解禁後もカトリックに復帰することなく、禁教期以来の信仰を実施し続けた。

3. 出津集落について

「外海の出津集落」も上記と同様に、何を拝みながら信仰を実践していたのかを示す集落の一つである。出津集落の潜伏キリシタンたちは、自分たちの信仰を隠しながらキリスト教由来の聖画像を密かに拝み教理書や教会暦をよりどころにすることによって信仰を実施した。そして、解禁後に潜伏キリシタンは段階的にカトリックに復帰し、集落を望む高台に教会堂を立てたことにより、彼らの「潜伏」は終わりを迎えた。

4. 大野集落について

大野集落も同様に、何を拝みながら信仰を実践していたのかを示す集落の一つである。禁教期の大野集落の潜伏キリシタンは、表向きは仏教徒や集落内の神社の氏子となり、神社に自分たちの信仰対象を密かにまつて拝むことによって信仰を実施した。解禁後、カトリックに復帰して、「外海の出津集落」にある出津教会堂に通っていたが、その後、大野集落の中心に教会堂を立てたことで彼らの「潜伏」は終わりを迎えた。

5. 大浦天主堂について

「大浦天主堂」は、「潜伏」が何をきっかけとして終わりを迎えたのかを示す構成資産である。日本の開国により来日した宣教師と潜伏キリシタンは、二世紀ぶりに大浦天主堂で信徒を発見した。その後続く大浦天主堂の宣教師都各地の潜伏キリシタン集落の指導者との接触によって転機が訪れ、カトリックへの復帰するものや、引き続き自分たちの信仰形態にとどまる者、神道や仏教に改宗する者に分かれ、「潜伏」は終わりを迎えた。

6. 原爆資料館と平和の取り組み方について

長崎の原爆資料館では、訪れた際日本人だけではなく様々な国の人々が訪れていた。それは、広島とあまり変わらず、今日も多くの人に核兵器の悲惨さを伝えているのだと感じた。展示している資料は、見やすく原爆が投下されるに至った経緯から始まり、核兵器開発などストーリー性があり、インストラクターの方が詳しく説明されていて資料と合わせてより深く学べた。長崎市では、核実験への抗議や平和宣言などで核兵器廃絶のアピールを行い、原爆展などを通じて核兵器の非人道性を訴え、同じ被爆地の広島市や国内外の平和を希求する市民と連携を図り、核兵器のない世界を目指して核兵器廃絶に取り組んでいた。

おわりに

本演習を受講して、長崎は自分自身初めて訪れる場所だったのでワクワクした気持ちある一方、自主研修など20箇所以上回る場所があったので計画通り動けるか心配だったが、無事全ての場所を回る事ができた。報告書では取り上げなかった場所も多くあるが、そのことも含め、長崎について歴史や文化を自分なりに目標を立て学べたのはもちろん、現代に起きている戦争や核兵器問題について考えさせられ、今後の生き方について教訓を学べた気がした。テレビやYouTubeなど、日々自分たちが目にするものよりも、実際にその土地に足を踏み入れることで、体験者の生の声を聞いたり、その場の空気感だったり自分の目で見て感じるなど、普段では感じることでできない体験をすることができ、とても貴重であったと感じた。時間が限られていたこともあり、ゆっくりと時間をかけて見学できた場所が少なかつたため、機会があればまた長崎を訪れたいと思った。今回、自分が見たり感じたりしたことを他の人に伝えることで、またそれも伝統や歴史の継承に少しでも力になれる気がした。このような経験を将来の夢に繋げていけるよう、さらに自分で調べ発展させていきたい。今後本演習が開講され、行き先は違うと思うが、迷っている人がいるなら自ら進んで受講を考えてほしいと思った。訪れた

ことのない土地について自分なりに調べ、自主研修など様々なことを計画するなど、それを経験できるのが、この演習の良いところだと感じた。改めて、この演習に参加できたことを嬉しく思う。

[参考文献]

長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産 パンフレット
長崎の平和 <https://nagasakipeace.jp>

文化遺産特別演習 —唐人屋敷跡地と中国茶—

2部日本文化学科 1年 2823125 嶋宮 亜香里

はじめに

筆者が唐人屋敷跡地を調査対象として選んだ理由は、筆者が元々唐人街など中国文化に関連する場所や中国文化に興味があった為である。

長崎が海外貿易で非常に大きな役割を担っていたことは、すでに歴史の授業で学んだことであつたが、唐人屋敷については知識がなかつた。文化遺産特別演習を通して唐人屋敷について調べていくうちに長崎とどのような関係があつたのか気になつた為、唐人屋敷跡地を調査対象とした。

唐人屋敷跡地と猫について

長崎の唐人屋敷について、フィールドワークを行うまでは規模が小さいと考えていたが、歩いて散策すると、かなりの距離がある事が分かつた。道においても、ただ平地ではなく主に坂道がほとんどである。唐人屋敷跡地には、観音堂・天后堂・土神堂・福建会館（正門 天后堂）の4つのお堂がある。

この4つのお堂は、どれも唐人屋敷の端に点在している。福建会館は市指定有形文化財、観音堂・天后堂・土神堂は市の史跡に指定されている。福建会館は前述した3つのお堂とは別に、唐人屋敷時代ではなく、唐人屋敷廃止後の明治時代に建設されたものである。だが原爆の風爆被害により倒壊したため、建設当時のものはほとんど残っていない状態である。火災により、すべてのお堂が1度焼失したが、のちに再建された。3つのお堂は崇福寺のように大きくはない。新地中華街のはずれにあるため、筆者がお堂を訪れた際には、観光客は一人もいない状態であつた。お堂は常に誰かがキレイに整備しているわけではない為、苔や草が生い茂っている所がほとんどであつた。

唐人屋敷の内部の概要は、複数の部屋と番所、牢屋や遺体安置所もあり、唐人屋敷の外に出ず、十分生活が可能であつたと考える。唐人屋敷には大門と二ノ門の二つの門があり、二ノ門から日本人で唐人屋敷に出入りができたのは、遊女のみである。たとえ役人であっても唐人屋敷に入ることは許されてはなかつた。遊女が唐人屋敷に長期滞在することは禁止されていたが、実際には遊女が唐人屋敷に長期滞在することが多かつたとされている。

唐人たちは屋敷の大火災をきっかけに、ほとんどの唐人が帰国してしまうが、唐人たちが持ち込んだ猫は帰国できず、長崎に残る形となつた。お堂に向かう途中、数匹の猫



通りすがりの野良猫

を見かけたが、この猫の先祖については、唐人屋敷に住みついていたお曲がり猫とされている。尻尾の先が杖の柄のように曲がっており、日本の猫の尻尾と比べると特徴的な形をした尻尾である。お曲がり猫は、唐人が持ち込んだ猫の遺伝子を持っているのではないかとされている。現在、唐人屋敷跡に住み着いている猫はほとんどが、野良猫だが地域住民の方が毎日、定時に猫に餌を与えており、時間近くになると猫が集会を開くのかのように集まってくる。この野良猫は唐人屋敷跡地にある店のシャッターにも描かれており、シャッターに絵を描いたのは地元の高校生であり、シャッターの絵を見るだけでも、猫と唐人屋敷跡地との関りが深いことが窺える。また唐人たちはお堂や猫以外にも橋の技術やお茶の文化を残している。

唐通事について

長崎の観光名所となっている眼鏡橋は、唐人たちの持ち込んだ技術が使われている。石をアーチ状にきれいに並べ橋を固定するという技術だが、この石の並べ方はとても難しく、まるでパズルのピースのように一つでも合わなければ、雪崩のように崩れ落ちてしまう。筆者は実際に石を積んで橋を立てた事はないが、石を積み重ねる体験を長崎歴史文化博物館で行った。

橋の技術を習得する際に、中国の技術を基に建設を行ったが、その際に、今でいう通訳の役割を担ったのが唐通事である。唐通事は中国語で通訳という意味を持っている。だが、唐人屋敷の唐通事は通訳だけが仕事という訳ではなく、唐人屋敷に住んでいた唐人の世話役も担っていたとされている。唐通事は日本語と中国語以外にもベトナム語やタイ語など、様々な言語唐通事があり、唐通事は主に大通事・小通事・稽古通事の3つの役割に分けられていたが、後に人員増加等により、17役まで役割が分担された。

中国茶について

唐人屋敷に長期滞在していた唐人たちは、日本へ来航する際に中国から二胡などの娯楽に使用するものや日常的に使う食器を持ち込んでいたとされている。その中でも中国から持ち込んだお茶をよく楽しんだとされている。筆者は唐人屋敷跡にある十善寺地区センターにて中国茶の体験を行った。

中国茶は紅茶（ほんちゃ）・黒茶（へいちゃ）・青茶（ちんちゃ）・黄茶（ふあんちゃ）・白茶（ばいちゃ）・緑茶（るーちゃ）の6種に分類される。この6種類は発酵度や発酵工程に違いがある。中国茶は必ずこの6種のどれかに分類される。最近では、6大茶葉以外に目で楽しむお茶として、花茶や工芸茶も人気である。

お茶には様々な種類があるが、中国茶と日本茶の違いはいくつかある。1つ目は、前述したが、茶葉の作業工程に違いがある。日本茶は時間が経つと渋みが増すことが多く、何度もお茶を楽しむことが難しい。だが、中国茶は、時間が経っても、



唐人屋敷跡地での中国茶体験

渋みや苦みが出るのがなく、何度でも楽しむことができる。また茶葉の種類によって、温度注ぐお湯の温度を変えなければならない。日本茶の茶葉は、お湯を注ぎ蒸らしても、茶葉が開くことはないが、中国茶の茶葉は、お湯を注ぎ蒸らすことで茶葉が開く。

2つ目は、お茶の楽しみ方に違いがある。日本茶は味を楽しむが、中国茶は香りを楽しむという違いがある。また、使用する道具についても茶壺、茶海、茶杯、聞香杯、茶盤、茶船、茶狭、茶杓、茶通という多くの道具を使い台湾式のみお茶の香りをより、楽しむため前述の道具以外に蓋椀という道具を使用する。これはお茶の香りを楽しむためだけの小さなお猪口のようなものである。

阿里山金萱高山茶（青茶）を台湾方式で、紅玉紅茶（紅茶）、黄金柱（青茶）、台湾龍井茶（緑茶）を中国式で頂いた。茶菓子はサンザシを砂糖などで煮詰めたドライフルーツ、カボチャの種、月餅の3種であり、どの茶菓子も中国では一般的に食べられている菓子である。頂いたどのお茶もそれぞれ違う香りであり、葉の開き方にも違いがある事が分かった。

感想

今回の文化遺産特別演習で唐人屋敷跡地の調査と中国茶の体験を行ったが中国茶は、どの地域でも体験はできるが、現地に出向いて地元の人のお話を聞きながら、体験・調べるといったフィールドワークを行うことにより、参考資料を読むだけでは、得ることのできない知識や情報を得る事が出来た。

教会やお城など坂や階段などが多く、直接見て回るという事が他の参加者に比べできない部分が多くあった。だが、長崎原爆資料館や長崎歴史文化博物館などの資料館では、長崎県に関する歴史を多く知ることができ、非常にいい経験ができたと考える。また、文化遺産特別演習に関わったすべての方に感謝したい。

[参考文献]

菊池和男『中国茶巡礼』小学館 2011年

平野久美子・布目潮風・周渝『中国茶と茶館の旅』新潮社 2004年

軍艦島クルージング・高島炭鉱跡地における歴史継承の現状

1 部日本文化学科 2 年 2722173 寺田 望

1. 強制連行の一現場である端島・高島

筆者は本演習において、端島（通称軍艦島）・高島における歴史継承が、どのように行われているか調査した。なぜなら、日中戦争・アジア太平洋戦争中、日本全国 135 カ所に中国人兵士・民間人が約 4 万人強制連行され、労働を強いられた結果、約 7 千人が死亡したからだ。北海道には約 2 万人が連行され、約 3 千人が死亡した。端島と高島の場合、いずれも 205 人の中国人が連行され、それぞれ 15 人が死亡した。また、同時期の端島には 500 人の朝鮮人も強制連行され、123 人が死亡している。なお、戦時中の高島における、朝鮮人の犠牲者数は不明である。

同様のことは 1930 年代から 1940 年代にかけて、中国本土の鉱山などにおいても行われていた。すなわち、一説では約 4 千万人の中国人が使役され、約 1 千万人が死亡したと推定される。中国人捕虜に同情的な日本人も一部には存在したが、中国人捕虜に対する扱いは、端島・高島を含め概して苛酷であったといえる。

戦後、日本の全国 34 カ所に中国人犠牲者の慰霊碑が建設されたが、すべての現場に慰霊碑が建てられたわけではない。そのため、強制連行の一例である端島・高島における慰霊碑の有無、また現地における歴史継承の内容を知るため、次の (1) と (2) を学習した。

- (1) 軍艦島クルージング
- (2) 高島町の炭鉱跡地および高島石炭資料館

2. 日本・旧ソ連における、強制連行・強制労働をめぐる歴史継承の比較

筆者は、旧ソ連・中央アジアのキルギス共和国に滞在中、イシク・クル州タムガ村のキルギス平和センターを訪れ、シベリア抑留について学んだ。同村には、日本兵が 125 人強制連行されたが、全員が生還している。彼らが建てた療養所には、同村の抑留・強制労働に関する資料室が設けられた。そこで、上記の (1)・(2) と平和センターにおける、第二次世界大戦期一本稿では、便宜的に日中戦争開始からアジア太平洋戦争終戦までを〈第二次世界大戦期〉とみなす一の強制連行・強制労働に関する歴史の展示・解説を比較することとした。なぜなら、日ソが中国人強制連行とシベリア抑留を行ったのは、いずれも戦争により労働力が不足していたからだ。また、両国とも捕虜の待遇を定めたジュネーブ条約を批准せず、強制連行・強制労働の被害国であると同時に、捕虜に対して同様のことを行った加害国でもあった。

たとえば日本の場合、シベリア抑留により、約 60 万人の軍人や文民が捕らえられ、最長で 11 年間労働を強いられた。日本側の死者数は約 6 万から 14 万人ともいわれ、犠牲者数は確定していない。一方、日本は上記の強制連行のほか、アジア太平洋戦争中、連合国の軍人を約 35 万人捕らえ、自国内や占領地域で働かせ、約 3 万 6 千ないし 4 万 2 千人を死に追いやった。

また、本土・植民地・占領地において、連合国民間人を抑留し、死亡者を出している。

ソ連の場合、独ソ戦中、約 570 万人の将兵がドイツ軍に捕らえられ、うち約 300 万人が死亡した。また、民間人も、約 280 万人がドイツに強制連行され、正確な人数は不明であるが、数十万人が命を落としたとされる。一方、ソ連は上記のシベリア抑留に先駆けて、ヨーロッパで約 312 万人の枢軸国軍将兵を捕らえ、うち約 46 万人を死亡させた。

3. 長崎において知ったこと

軍艦島クルージングは端島に加え、高島や長崎港各地など、歴史的名所の解説を聴くことが可能だ。しかし、筆者が参加したツアーの場合、第二次世界大戦の話題は、原爆投下による被害に限定されており、長崎造船所における連合国軍捕虜や、端島・高島における中国人・朝鮮人の強制労働は語られていなかった。

高島石炭資料館の場合、年表などの展示内容は、専ら島民の生活に限定しており、中国人・朝鮮人の強制連行に一切触れていない。また、高島の史跡である仲山新坑坑口跡一同坑口は、1935 年に作られたものであり、強制連行された中国人も、同坑口を出入りしたと思われる一に立てられた説明板も、炭鉱の概要を述べるのみで、強制連行のことは言及していない。無論、石炭資料館の資料室には、郷土史や郷土資料が存在するため、そうした文献や史資料を読むことで、強制連行のことを学べる可能性がある。しかし、筆者が観察した限りでは、中国人・朝鮮人強制連行を主題に扱った書籍は見当たらなかった。

4. 端島・高島・タムガにおける歴史継承の現状

端島や高島は、強制連行の事実を知ることができない状態だ。地域によっては慰霊碑を建設し、歴史の継承に努めているが、端島・高島において、そうした取り組みは行われていない。また、クルージングにおける歴史の解説は、加害の側面に触れておらず、一面的であるという印象を受ける。同様に高島においても、上記の坑口跡などといった炭鉱史跡はおろか、町の歴史を解説する資料館でさえ、強制連行に言及しないことに違和感を覚えた。島内に点在する史跡の管理は財政的に困難—坑口跡は草木が繁茂している—であっても、資料館で強制連行の事実を解説することは、不可能ではないはずである。

一方、2017 年においてキルギス平和センターは、シベリア抑留の全体像を説明しておらず、タムガ村の強制労働に限定して歴史を解説していた。日本側からの寄贈品として、ソ連各地における抑留の証言集も展示されていたが、見学者の全員が日本語を理解しうるわけではない。そのため、書籍が歴史学習の手段として十分に活用されておらず、単なる装飾品と化しているように思われた。書籍を翻訳することは財政的に困難であっても、少なくともシベリア抑留の概要、換言すれば暫定的な全体像を伝えることが必要であると考え。なぜなら、タムガ村の抑留という、例外的に死者を出さなかった事例の展示に終始する場合、ソ連の加害性が、必ずしも訪問者に伝わらないためだ。すなわち、シベリア抑留全体において、ソ連が旧枢軸国の人間を多数死亡せしめた事実が、見学者に伝達されづらいのである。このように、観光地の端島・高島と、保養地のタムガ村は、強制連行の事実を展示しているか否か、という相違点を有しつ

つも、自国の加害性に対して関心が薄い、という類似点が見受けられる。

しかし、史跡は〈負の歴史〉の舞台でもある場合がある。また、世界遺産の「顕著な普遍的価値」には、そうした〈負の歴史〉も含まれるのだ。実際、ユネスコ世界遺産委員会は日本政府に対し、「明治日本の産業革命遺産」について、強制連行の事実も説明するよう求めた。同委員会は2023年、日本政府が上記の勧告を実行したと認めたが、やはり端島・高島においても、強制連行の事実を展示・解説すべきであると考え。なぜなら、軍艦島クルージングや高島の炭鉱跡地および資料館は、〈負の歴史〉をも伝えることで、他国との友好関係に活かしようとする展示やツアーとなるからだ。すなわち、本稿で扱ったタムガ・端島・高島の展示・解説は、国籍を問わず訪問者が過去の事実が発生した現場、あるいはその付近において歴史を学び、今後の他国との関係を考える契機となりうる。そのため、島民の生活や捕虜の生還といった明朗な歴史のみならず、〈負の歴史〉をも含めて展示・継承する必要があるだろう。

[参考文献]

- 青木茂『万人坑に向き合う日本人—中国本土における強制連行・強制労働と万人坑—』花伝社、2020年
 上野志郎『「事業場報告」が記録した中国人強制連行』北海道新聞社出版局、2009年
 内海愛子『日本軍の捕虜政策』青木書店、2005年
 内海愛子・永井均編集『東京裁判資料—俘虜情報局関係文書—』現代史料出版、1999年
 大木毅『独ソ戦—絶滅戦争の惨禍—』岩波新書、2019年
 強制連行中国人殉難労働者慰霊碑資料集編集委員会編『戦後70年記念 強制連行中国人殉難労働者慰霊碑—資料集—』日本僑報社、2016年
 小宮まゆみ『敵国人抑留—戦時下の外国民間人—』吉川弘文館、2009年
 杉原達『中国人強制連行』岩波新書、2002年
 高杉一郎『極光のかげに—シベリア俘虜記—』岩波文庫、1991年（初版1950年）
 田村光彰「第三帝国における強制労働」、『北陸大学紀要』第28号、2004年、267-281頁
 富田武『シベリア抑留—スターリン独裁下、「収容所群島」の実像—』中公新書、2016年
 富田武・長勢了治編『シベリア抑留関係資料集成』みすず書房、2017年
 長崎在日朝鮮人の人権を守る会編『軍艦島に耳を澄ませば—端島に強制連行された朝鮮人・中国人の記録—』社会評論社、2011年
 日本中国友好協会北海道支部連合会編集・発行『知っていますか北海道での中国人強制連行—全道五十八事業場殉難の記録—』1989年
 野添憲治『企業の戦争責任—中国人強制連行の現場から—』社会評論社、2009年
 北海学園大学人文学部世界遺産研究班編『世界遺産とは何か？—さまざまな「物語」を読み解く—』マイナビ出版、2020年
 油井大三郎・小菅信子『連合国捕虜虐待と戦後責任』岩波ブックレット321、1993年
 レネ・シェーファー、緒方靖夫訳『オランダ兵士長崎被爆記』草土文化、1983年

[参照サイト]

白石透冴「軍艦島巡り「強い遺憾」採択 世界遺産委 朝鮮半島出身労働者の説明「不十分」『日本経済新聞』2021年7月22日

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGR223220S1A720C2000000/> (2023年11月10日閲覧)

「ユネスコ、軍艦島の日本対応を承認 21年「不十分」一転」『日本経済新聞』2023年9月15日

<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOCB150410V10C23A9000000/> (2023年11月10日閲覧)

竹内康人「三菱鉱業高島炭鉱・端島炭鉱への強制連行」

http://www.cks.c.u-tokyo.ac.jp/event_back/170709/170709_takeuchi.pdf (2023年11月10日閲覧)

千葉県立東部図書館「シベリア抑留で亡くなった日本人の数が載っている本はあるか。」、『レファレンス共同データベース』2017年2月24日、

https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000210446
(2023年11月10日閲覧)

賑を伏せる街

1 部英米文化学科 2 年 2922189 森崎 涼音

はじめに

今回の、長崎市内の自主研修に先立って私が掲げていた目的は、文化の混じりあう地、長崎では各宗教の儀式や考え方も混ざり合っていたのかを調べることである。長崎が、古くから国際交流が盛んな土地であったことは言うまでもない。そして、多くの外国人が長崎にそれぞれの宗教を含む文化を伴って渡ってきたことも多くの人が知る事実であろう。しかし、日本本来の文化に外国由来の文化が取り入れられることは珍しくもないが、宗教同士の混流に関してはどうか。長崎には、キリスト教が伝来し広まった歴史がある。つまり、他地域では仏教、神道がメジャーであるが、長崎には仏教・神道・キリスト教と少なくとも三つの宗教が存在していることになる。ならば、神仏混淆の事例と同じようにキリスト教文化も他二つの宗教と何かしら混合されてしまったのだろうか。この目的を基にして市内を歩き周り教会、寺、そして神社といった各宗教の施設を訪れた。このレポートでは、そこで得た見聞と市内研修前の平戸や外海で学んだ潜伏キリシタンに関する知識等を組み合わせながら、目的の問に対する自身の解を示していきたいと思う。

散策箇所の紹介

自主研修の一日目の目的地は、浦上天主堂から長崎原爆資料館へ。それから浦上キリシタン資料館を訪ねたのちに山王神社に向かい、長崎歴史文化博物館へ。そこから商店街を抜けて、諏訪神社を訪れたのちに宮地嶽八幡神社に足を運んだ。最後に寺町にある興福寺を参拝し、一日目は終了した。本来、浦上キリシタン資料館と宮地嶽八幡神社は目的地として事前に設定していなかったものの、散策中に発見し、自身の目的と関連していると思い、急遽足を運んだ。

二日目には、軍艦島デジタルミュージアムを訪れ、そのまま大浦天主堂、グラバー園、長崎伝統芸能館そして崇福寺を参拝して研修を終了した。伝統芸能館を訪ねた理由については、諏訪神社の祭事である「長崎くんち」に関する展示を見るためであり、このことについては後述する。

研修の成果

さて、先述した通り私の研修目的は、宗教同士の混淆の有無を確かめることである。

実際に宗教施設を訪れ、そこで多くのものを見て、聞いた今、敢えて結論を出すのならば、宗教同士の混流があった形跡は見られなかったというのが私の率直な意見である。どちらかと言えば、各宗教それぞれが互いに干渉し合わずに、一つの町でひしめき合っているという印象を強く受けた。そして、これは実際に市内を歩き回って気づいたことなのだが、浦上天主堂の近くには大きな神社や寺がない。勿論山王神社は、浦上天主堂から徒歩で行ける距離にはある

のだが、参道が少しばかり長いだけで小ぢんまりとしている神社であるから、諏訪神社のような仰々しさはない。地図で調べてみたところ、浦上天主堂の付近には、山王神社や二、三の寺院が点在するくらいしか、キリスト教以外の宗教施設は見られなかった。この事例は、諏訪神社や寺町にも同様に見られた。

興福寺を訪ねた際に、拝観料を支払うために受付の女性に興福寺について少し話を聞いた際のことなのだが、「興福寺は隠元禅師によって開かれた唐寺で、そこにはキリスト教弾圧のために仏教の力を強めたいという幕府の意図もあったと思う」と、その人は語ってくれた。この言葉を基に興福寺について少し調べてみると興福寺の公式HPの方に、このような記載が見られた。以下に引用する。



興福寺正門

諸国より寄せられた寄進により山門を建て、隠元禅師自ら筆をとり「東明山」の額を書かれたので、これを興福寺の寺号とした。この額は今も山門に掲げられているが「祖道暗きこと久し必ず東に明らかならん」という意味の規模壮麗なもので、隠元禅師をもって、興福寺中興の開山とするゆえんである。

長崎滞在一年後、禅師は、京都妙心寺竜溪禅師らの懇請により上京、将軍家綱に謁し、勅を承けて日本に留まる決心を定め、寛文元年（1661）、京都の宇治に故郷黄檗山の山号寺号にちなんだ同じ名の黄檗宗大本山万福寺を開山、僧俗貴賤多くの人々と交わり、慕われて81歳でこの地に永眠された。

HPによると、実際に隠元禅師が上京し、将軍に謁見し長崎ではなく京都に新たな寺を開いたことが読み取れる。当時の京都と言えば政治的にも文化的にも重要な場所であり、その場所にわざわざ隠元禅師を招いて、寺を開いてもらったとなれば、幕府がどれだけ仏教に重きを置いていたのかは明らかなように思える。更にHPの興福寺を紹介する段落には次のような記述もみられる。以下、引用。

なかでも中国からの来航者は圧倒的に多く、市民の6人に1人は中国人というほどで、出身地別に寺を建立したのが興福寺をはじめとする崇福寺、福濟寺などの長崎唐寺（とうでら）の始まりです。

また、この時代は、キリスト教禁令が厳しくなり、長崎在住の中国人にもクリスチアンの疑いがかかったため、仏教徒であることを誇示するためにも、つぎつぎと唐寺が建てられたともいわれます。

はっきりとした記述があるため、わかりやすく大変助かるのだが、唐寺の建立は純粋な信

仰と、キリスト教弾圧を躲すためという目的まで持ち合わせてしまっていたことがわかるだろう。

そして、この手の話は諏訪神社にも存在する。先述した長崎伝統芸能館であるが、そこで展示されている山車や傘鉾は諏訪神社の祭り、長崎くんちで使用されるものである。では、長崎くんちとは一体何なのか。長崎くんちの起源は寛永11年に遊女の高尾と音羽が神前で舞を奉納したことが始めとされている。以降それぞれの町が年ごとに「踊町」と呼ばれる当番町として本踊りや曳きものを奉納し、街を練り歩くようになった。ここまでは、他地域で開催されている祭りとも何も変わらないように思われるだろう。しかし、この長崎くんちはキリスト教弾圧のために一役買っていたというのだ。



諏訪神社拜殿

また、図3に「正一位諏訪方社」としてみえる諏訪神社は、弘治年間（1555～58年）に長崎氏が京都の諏訪神社の分霊を迎えたものという。1648（慶安元）年に現在地に移り、秋の祭礼おくんちは長崎の脱キリスト教に大きな役割を果たした。（大平、p.23）

つまり、長崎くんちという祭事は、キリスト教から目を背けさせるための催しものとしての側面も持ち合わせていたようなのである。唐寺も神社も、本来の役割を果たしながらどこかキリスト教の排除のために使われていたとするならば、宗教同士の混淆はなくとも、あるべき姿を多少歪め合うような影響をキリスト教は与えたとするのが妥当だろう。

では、長崎市外ではどうだったのか。平戸や外海に於ける潜伏キリシタンの場合、事情がまた変わってくるのだろうか。平戸では、春日集落の春日集落案内所かたりな、において、春日は交易の為に平戸藩の家臣が自身と集落ごと改宗させたとの話を伺った。そして、長崎歴史資料博物館や大浦天主堂の博物展示エリアにも同様の紹介文と、島原の乱以降、切支丹として密告されても本人の自白が無い限り、切支丹とはみなされず「異宗」と判断されることが多かったとの情報を得ることができた。更に、平戸には信徒発見後もカトリックに合流せずに独自の信仰を続けている人々もいる他、観音像を聖母マリアに見立てて拝んでいたという話もある。以上のことから、当時のキリスト教は現在我々の知るキリスト教とは大きく異なっていると言えるのではないだろうか。そもそも、渡来してきた宣教師たちがどれだけ日本語を話せたのか、何を以てキリスト教を理解し、真に敬虔な信徒と言えるのか。結論から言えば、日本人特有のアニミズムの中の一つに新たにキリスト教の神様が追加されただけである。

このことを、当時の日本人にフィットするように形を変えた柔軟なキリスト教と捉えるか、はたまた、数多い日本の「八百万」に新たに異国の神が列をなしたと捉えるかは別の問題として、日本的宗教観とキリスト教的宗教観が入り混じっていたことは明らかであると言えよう。

終わりに

今、長崎は「潜伏キリシタン関連遺跡」という世界遺産を保有している。つまり長崎においてキリスト教は切っても切り離せない存在であり、ある種のアイデンティティである。古く、渡来した「キリスト教」がいかなる形であろうとも、人々は脈々とそれを次の時代につないできたその事実は変らない。そして互いに利用し、利用され牽制しあった宗教でも、祈りの本質はきっと同じものだと思う。このことは異なる宗教が静かに隣同士として身を寄せ合っている、長崎でしか気づけなかったことだと思う。それぞれの宗教が、対立し互いに排斥しようとしているわけでもなく、とは言え、互いのすべてを受け入れ、認めることもない。相手の存在を見て見ぬふりをするように、臉を伏せ合うのがこの街のらしさなのかもしれない。

[参考サイトと文献]

縁起 / ゆかりの唐僧：：東明山 興福寺 (kofukuji.com) 最終閲覧 2023/10/26、22：48
<http://kofukuji.com/contents.php?contID=1>

『古地図で楽しむ長崎』大平晃久 風媒社 2020/10/9 第1刷発行

『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』宮崎賢太郎 角川書店 2018/2/22 第1刷発行

文化遺産特別演習を通して学んだこと、感じたこと

1 部日本文化学科 3年 2721147 田中 龍生

今回、私は文化遺産特別演習で4泊5日で長崎の文化遺産を訪れました。私が文化遺産特別演習に参加した理由は、歴史に関心があり、どこかに旅行する機会があるとその土地の歴史的な建築物を訪れていました。そのため、文化遺産特別演習で様々な文化が入り混じっている長崎に行くのはとても惹かれたので参加しようと思いました。5日間で様々な場所を訪れたがその中で特に印象に残った場所をいくつか記述したいと思います。

最初は出島です。出島は歴史の教科書にも載っている江戸幕府が交易する場所を限定するために埋め立てられて造られた扇状の人工島です。1636年に完成し約200年もの間、わが国で唯一西欧に開かれた窓として大きな役割を果たしてきました。現在の出島は明治以降に港湾整備などで周囲を埋め立てられて扇状の形が見えなくなりました。実際に行ってみると海は近いですが、出島からは海が見えないので一般的な出島のイメージとは違うように思いました。出島では江戸時代の生活を模した部屋や発掘調査で出土した資料などが展示されていて、オランダ商館長などのオランダ人が使用していた部屋は畳といった和風様式に絨毯やテーブルといった西洋の家具などが使用され、改めて文化の交じりを感じられる場所でした。

二つ目は、長崎孔子廟・中国歴代博物館です。孔子廟とは、儒教の創始者である孔子を祀っている霊廟のことです。儒教の影響がみられる地域にあることが多く、日本にも各地に孔子廟が見られます。長崎にある長崎孔子廟・中国歴代博物館は1893年に唐人屋敷があった長崎に清朝政府と華僑によって中国の総本山並に伝統美あふれた孔子廟が作られました。この霊廟は、日本で唯一の本格的中国様式の霊廟です。内最大の孔子坐像を祀る大成殿やひとつとして同じ顔のない七十二賢人の石像があり、博物館には中国の貴重な資料や多数の銘品が展示されています。日本で唯一の本格的中国様式の霊廟と言われるだけあって、雰囲気などが日本にいるというより中国にいるような錯覚がありました。成り立ちをみても、もともとは日本人のために作ったというよりは、日本にいる華僑のために作られ建物なので、華僑がアイデンティティーを守るために自分たちの文化や様式を持ち込んだ結果なのではないかと新地中華街や興福寺なども訪れてみて思いました。

3つ目は、グラバー園です。グラバー園は、長崎に来住したイギリス人商人グラバー、リンガー、オルトの旧邸をメインに敷地に歴史的建造物を移築した野外博物館です。一番の目玉である旧グラバー住宅は、イギリス人のトーマス・グラバーという人物によって建築されました。トーマス・グラバーは、輸入品として蒸気船や武器を扱ったり薩摩藩士などのイギリス留学を手伝うなどしました。また、大阪造幣局の開設や現代の「麒麟ビール株式会社」の前進会社であるビール会社「ジャパン・ブルワリー・カンパニー」の設立したりするなど、日本の近代化に貢献した人物です。建物としては西洋風の住宅ですが、日本瓦や漆喰を用いるといった和の要素も見られる建物です。西洋の建物に和の要素を入れるのは言葉にするとアンバランスな

ように感じられましたが、実際に見てみると見事に調和されていて違和感を覚えるようなところはありませんでした。建物も立派ですが、それ以外の部分も興味がそそられるものがあります。例えば、日本最初期のアスファルト道路があります。グラバー園の敷地や園に向かうまでに、急な坂が多くあります。ここに住んでいたフレデリック・リングーという人物は、晩年には心臓病を患っていて坂を移動するのは厳しくなっていました。リングーは坂の下から住宅の前までアスファルトで舗装された道で造り、人力車が通れるようにしました。その他にも、居留地時代の面影を残す石畳や石段も存在しています。グラバー園は、異国情緒が溢れる場所なのだけでなく、日本の要素も見られるような場所でも興味深かったです。

最後は、原爆資料館や平和公園といった原爆関係の場所です。学校の授業などで原爆についてのことは勉強していましたが、やっぱり知識としてとても重要なことであるとわかっていても、80年近くまえのことなどであまり現実感がわかないというのが行く前の感想でした。さらに被爆地といったら、原爆ドームがある広島イメージが強くて印象が薄くなっていました。しかし、実際に行ってみるととても生々しいというのが、最初の感想でした。展示の内容は、ガラスが融けてビン同士が合体したものや中身が炭化した弁当箱といった日常生活に関するものが多く展示されていて、個人的にはそういったものの方が壊れた建物よりもインパクトがありました。他にも爆発によって発生した熱線によって影が焼き付けられたものが展示されていて、この当時とても想像がつかない、とても恐ろしいことが起こったのだと感じさせる場所でした。あらためて、こういう戦争遺構は実際に行ってみないと何が起こったのかについて正しく認識できないのではないかと思います。

この演習を通して訪問した場所で、興味深かったものは上記以外にもたくさんあります。松浦資料博物館や大浦天主堂、長崎市亀山社中記念館、長崎市旧香港上海銀行長崎支店記念館などがあります。実際に建物や資料を見てみると、事前に調べたこととの印象が違うように感じるが多かったです。教科書や資料集の載っている絵や写真のものを見ることで、遠い過去の話だと思ってしまう事も一気に現実感が出てくるので、何かを学ぶ際には現地、現物を見ることは知識を深めるのに役立つと考えます。知っている内容でも、実際に目にすると考えさせてくれるものが多かったです。改めて興味を持っていることだけでなく、もう知っていることも現地に赴いて見たり聞いたりすることで、何か新しいことを知ることができたので、このような機会がまたあるのなら積極的に参加していきたいと思います。

[参考資料、文献]

ながさき旅ネット

『世界史の中の出島』森岡美子、金井圓監修 長崎文献社 2005年

<https://nagasaki-koushibyou.com/> 【公式】長崎孔子廟・中国歴代博物館ウェブサイト (nagasaki-koushibyou.com)

「鎖国政策下の日本貿易」浅田毅衛 『明大商学論叢』82(1) 2000年

令和5年度 文化遺産特別演習報告書 第3号

発行日 令和6(2024)年3月1日

発行 北海学園大学人文学部

印刷 株式会社アイワード

文化を学ぶ 世界と繋がる



北海学園大学人文学部

日本文化学科(1部・2部) / 英米文化学科(1部・2部)

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL.011-841-1161(代表) FAX.011-824-7729

URL <https://human.hgu.jp/>